

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅶ

1999年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

2000年3月

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅶ

1999年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

2000年3月

序

富山湾に面し海の幸、山の幸に恵まれた氷見市は、古くより人々の生活の場として、数多くの文化遺産を育み、守ってきました。

特に、大正7年に調査された大境洞窟は、日本で最初の洞窟遺跡調査として、同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として、学史にその名を留め、国指定史跡になっております。

しかしながら、近年、生活の豊かさ、利便さを求めて開発が進められる一方で、これらの貴重な文化遺産の保護のための営みも重視されているのであります。

市教育委員会といたしましては、文化遺産保護のため、市内全域の詳細分布調査を実施することにより、より充実した遺跡地図を作成することにいたしました。

文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは、眞の地域社会の発展につながるものであると考えます。

この報告書がより多くの方々に利用され、文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに、調査の実施及び報告書の作成にあたり、ご協力いただきました地元の方々、またご援助いただきました富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

氷見市教育委員会

教育長 江幡 武

例　　言

- 1 本書は、富山県氷見市教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第7年(1999年度)の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センター及び富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成してこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、氷見市教育委員会生涯教育課主任学芸員大野究と富山大学考古学研究室の全員が協力して行った。
- 4 本文は、前川要・高橋浩二(富山大学人文学部)、大野究(氷見市教育委員会)、中谷正和・浅野良治・高志こころ・戸簾暢宏(富山大学大学院人文科学系研究科学生)、猪狩俊哉・小栗由希代・小泉史恵・澤野慶子・新田由紀・田中洋一・葛川貴祥・床平慎介・豊田恒一郎・山下研・山本教幸・遊佐真一郎(富山大学人文学部考古学研究室学生)が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。
- 5 参考文献は本文末に括し、通し番号を付して記した。
- 6 遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図と写真の番号は統一して用いた。
- 7 採集遺物・記録書類は氷見市教育委員会で保管公開している。
- 8 編集は前川要・高橋浩二・大野究の指導の下に、中谷正和・浅野良治・高志こころ・戸簾暢宏が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 氷見市の地勢と自然環境	4
4 1999年度調査区の地勢と地区割	4
第2章 分布調査の成果	7
1 遺跡と採集遺物	7
(1) 騾境塚	7
(2) 騾中世墓	7
(3) 中波貝塚	7
(4) 中波天神の森遺跡	7
(5) 夜城跡	7
(6) 蛍が島遺跡	7
(7) 九殿浜遺跡	7
(8) 長坂ソウト遺跡	8
(9) 長坂行入塚遺跡	8
(10) 長坂貴船遺跡	8
(11) 八代仙岩屋跡	8
(12) 大境洞窟遺跡	8
(13) 愛塚	10
(14) 騾方十三塚遺跡	10
(15) 騾方谷内出中世墓	10
(16) 騾方横穴群	10
(17) 戸津宮中世墓	10
(18) 白河城跡	10
(19) 宇波ヨシダ遺跡	11
(20) 熊野神社古墳群	11
(21) 婦鉢神社遺跡	11
(22) 宇波高坂遺跡	11
(23) 宇波コウラウラ遺跡	11
(24) 宇波庚申塚	12
(25) 宇波古墳	12
(26) 宇波洞穴	12
(27) 泊洞穴	12
(28) 小杉谷内遺跡	12
(29) 泊馬当遺跡	12
(30) 蔡田遺跡	13
(31) 蔡田榮師遺跡	13
(32) その他の採集遺物	13
2 遺物の散布状態	14
(1) 鐘紋時代遺物の散布状態	14
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態	14
(3) 古代遺物の散布状態	15
(4) 中世遺物の散布状態	15
(5) 近世遺物の散布状態	15
(6) 小結	15
第3章 おわりに	25
参考文献	29

図版目次

	関連頁
図版1 G地区の航空写真(1)	1947年撮影… 1～6
図版2 G地区の航空写真(2)	1992年撮影… 1～6
図版3 遺物実測図(1)	葛川・床平作成… 11～13
図版4 遺物実測図(2)	葛川・床平作成… 9・14
図版5 遺物写真(1)	前川撮影… 11～13
図版6 遺物写真(2)	前川撮影… 9・14
図版7 G地区的遺跡と遺物採集地点(1)	新宅作成… 7
図版8 G地区的遺跡と遺物採集地点(2)	澤野作成… 7
図版9 G地区的遺跡と遺物採集地点(3)	小栗作成… 8
図版10 G地区的遺跡と遺物採集地点(4)	猪狩作成… 8
図版11 G地区的遺跡と遺物採集地点(5)	農田作成… 8～10
図版12 G地区的遺跡と遺物採集地点(6)	田中作成… 10・11
図版13 G地区的遺跡と遺物採集地点(7)	山下作成… 11・12
図版14 G地区的遺跡と遺物採集地点(8)	山本作成… 12・13

挿図目次

第1図 水見市の地勢と地区割図	農田作成… 3
第2図 G地区図	山本作成… 5
第3図 G地区地区割図	小泉作成… 6
第4図 G地区遺跡分布図	山下作成… 17
第5図 繩紋時代遺物の散布状態	小泉作成… 18
第6図 弥生・古墳時代遺物の散布状態	小泉作成… 19
第7図 古代遺物の散布状態	小泉作成… 20
第8図 中世遺物の散布状態	小泉作成… 21
第9図 近世遺物の散布状態	小泉作成… 22
第10図 時期不明遺物の散布状態	小泉作成… 23
第11図 水見市の古地理図	浅野作成… 24

第1章 はじめに

1 調査の目的

氷見市が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約1万年前、上庄川上流域の丘陵においてである。以後、遺跡は丘陵から海岸まで広く分布し、現在に至るまで連続と人びとの営みが続いたものと思われる。

氷見市の遺跡の数は、大正7年（1918）の大境洞窟・朝日貝塚の発見以後、昭和47年（1972）の『富山県遺跡地図』では83箇所、昭和58年（1983）の『氷見市遺跡地図』では143箇所と、年々増加してきている。

しかし、これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく、その範囲・時期などについて不明な点が多く、また未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予測される。

また近年の開発の増加に伴い、遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。

2 調査の経過

このような状況のもと、氷見市では平成4年度からスタートする第6次総合計画の主要施策のひとつとして、「指定文化財の再調査はもとより、指定以外の文化財、埋蔵文化財の調査・発掘及び資料の収集に努め、活力ある文化財として、郷土の歴史的遺産の保護・顕彰をはかる」ことをあげ、主要事業のひとつに「遺跡地図の作成」をあげた。

これを受けて氷見市教育委員会では、平成4年度に昭和58年の『氷見市遺跡地図』発行以後の新知見を加えた『氷見市遺跡地図』〔第2版〕を発行し、234箇所の遺跡を登録した。

さらに、平成5年度からは、この遺跡地図をさらに充実させるため、国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては、氷見市教育委員会を中心とし、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て、下記の調査団を編成した。

調査の方針としては、市域の平野部全体を調査対象とし、7箇年計画とすること、年度毎に報告書を作成し、最終的には、より充実した遺跡地図を刊行することが決定された。

今年度の現地調査は、G地区について（第1回）、1999年11月3日～12月17日までの間、計29日間、延べ170人余の参加を得て、実施した。

（大野 実）

氷見市埋蔵文化財分布調査団

團長：江幡 武（氷見市教育委員会教育長）

調査員：前川 要（富山大学人文学部教授）

高橋 浩二（富山大学人文学部講師）

鈴木 瑞磨（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

大野 実（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

調査補助員：大塚 純司・田中 学・浅野 良治・高志こころ・戸簾 晃宏・中谷 正和
(富山大学大学院人文科学研究科学生)

高安 洋治・荒木 慎也・磯村 愛子・佐々木亮一・砂田 駿司・高橋 泰生・
遠野いずみ・貴井 美鈴・廣瀬 直樹・真井田宏彰・渡辺 樹・阿部 茂・井出
靖大・瓜生日奈子・表原 孝好・片桐 清恵・川端 良招・笠井 史生・塙田
直哉・不鳴 美穂・的場 茂晃・八巻 謙司・山口 欠志

(富山大学人文学部考古学研究室三、四年生)

調査協力者：猪狩 俊哉・小柴由希代・小泉 史忠・澤野 慶子・新宅 由紀・田中 洋一・
鳥川 貴祥・床平 慎介・豊田恒一郎・山下 研・山本 敏幸・遂佐真一郎

(富山大学人文学部考古学研究室一年生)

安瀬 佳織・遠藤 直樹・岡田 幸・折田 晃子・北川 康介・柳井 絵里・
佐藤絵里奈・田中 俊輔・橋場 和広・福沢 佳典・向島 裕・吉村 晶

(富山大学人文学部一年生)

事務局：石崎 久男（氷見市教育委員会生涯学習課課長）

阿尾 博子（氷見市教育委員会生涯学習課課長代理）

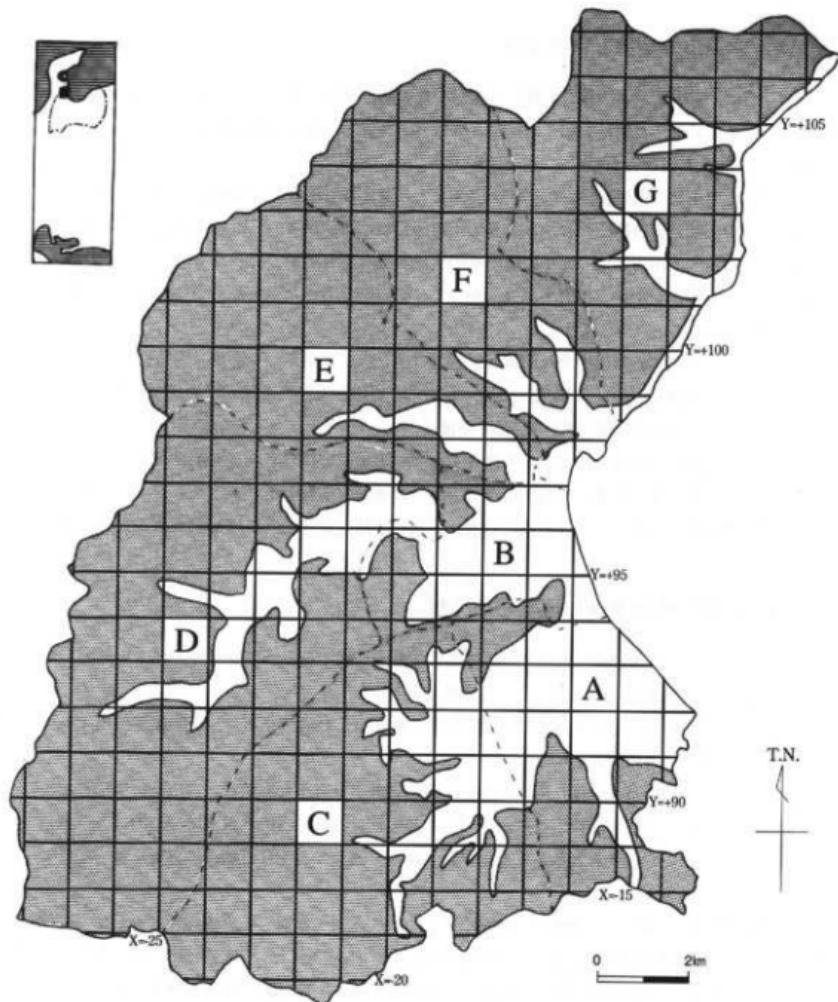
坂本 研資（氷見市教育委員会生涯学習課文化係長）

串田 真弓（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

布尾 健（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

小谷 超（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

石出 忍（氷見市教育委員会生涯学習課主事）



A 地区	1993年度調査地区	E 地区	1997年度調査地区
B 地区	1994年度調査地区	F 地区	1998年度調査地区
C 地区	1995年度調査地区	G 地区	1999年度調査地区
D 地区	1996年度調査地区		

第1図 水見市の地勢と地区割図（国土座標X = 138°59'55", Y = 35°48'00"を基準とする）

3 氷見市の地勢と自然環境

氷見市は、富山県の北西部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230平方km、人口は約6万人である（第1図）。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り、山間部では地滑りが多い。市北半部は、上庄川・余川川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外は、まとまった平野が少ない。市南半部は、かつてラグーンであった平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は、海岸線のほぼ中央に位置し、近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡を結ぶJR氷見線が通り、主要道路では、高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と、富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は、稲作を中心とした農業と、ブリ定置網に代表される漁業であるが、近年は第二・三次産業就業者が多く、高岡市など市外へと通勤する人が多い。

一方で能登の観光地として、市内には旅館・民宿が建ち並び、近年は温泉も市内各地で噴出している。

4 1999年度調査区の地勢と地区割

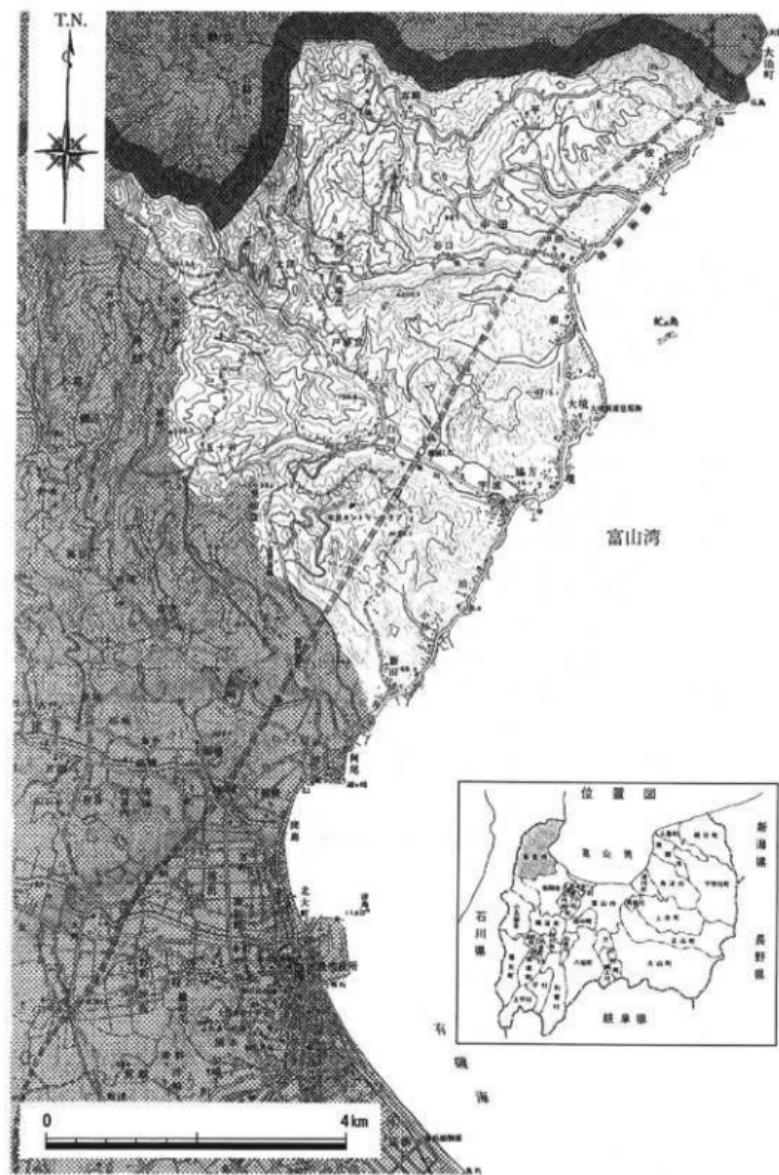
本年対象とするG地区は、市域の北に位置する灘浦地区である。調査は踏査によるものとし、対象は平野部と丘陵部の農地とした（第2図）。

G地区は、富山湾に向かって丘陵が海岸部までせり出した地域であり、平野は宇波川・下田川などの、小河川流域に限られる。

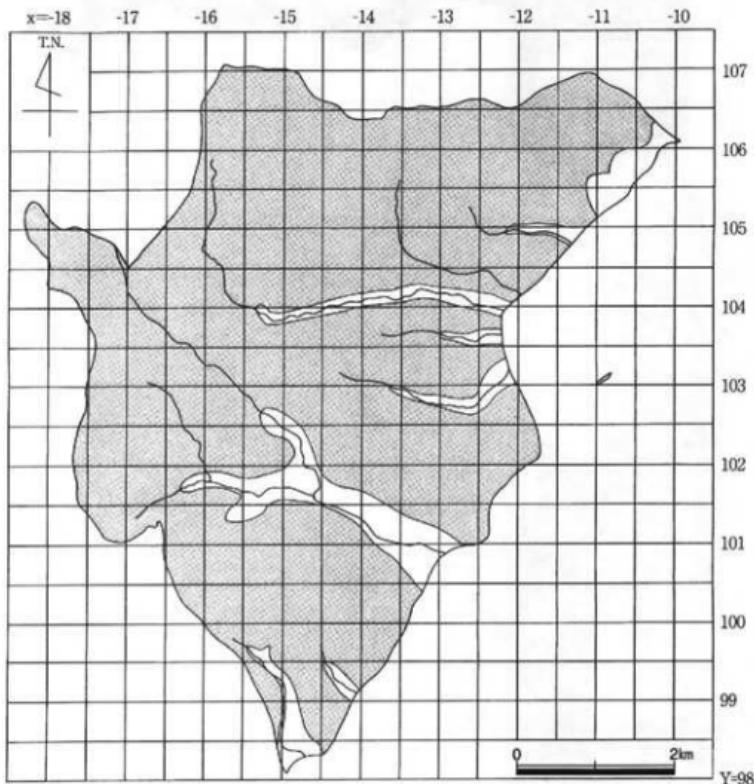
しかしながらこの地区では、繩文・弥生時代の資料が豊富な大境洞窟、古墳時代後期の宇波古墳、同じく製塙遺跡の九殿浜遺跡が古くから知られ、古代には宇波川流域を中心、「宇納郷」が成立していたとみられる。また、中世・近世を通して、能登石動山の影響を強く受けた地域でもある。

現地調査は、調査区を丘陵尾根・道路などによって大別・細別して実施した。そしてその結果を氷見市都市計画図座標に沿って四角座標X=138° 59' 55"、Y=35° 48' 00"を原点とする…辺500mの方眼を単位として集計し（第3・4図）、時期別の採集遺物量を図示して、遺跡の盛衰と立地の変化を把握する基礎資料とした（第5~10図）。なお、提示した座標値は、方眼の北東角の座標値である。

（大野 究）



第2図 G地区図（縮尺 1/75,000）



第3図 G地区地区割図

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物

(1) 脇塙壙 (図版7の1) 氷見市脇

氷見市東北端、海岸沿いの台地上に立地する。標高は約25mを測る。現在は圃場となっている。塚とされているが詳細は不明である。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(2) 脇中世墓 (図版7の2、氷見市遺跡地図第2版124) 氷見市脇

氷見市東北端の脇集落にある須久那神社境内に立地する。標高は約4mを測る。過去に珠洲甕と石塔が確認されている。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(床平慎介)

(3) 中波貝塚 (図版7の3、氷見市遺跡地図第2版1) 氷見市中波455

女良漁港付近、南方に向かって傾斜している山裾に立地する。標高は約10mを測る。現在は住宅地となっている。過去に繩紋上器2片（串田新式）、繩紋時代後期の定角形の小形磨製石斧1点が採集されている（添 1966）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(4) 中波天神の森遺跡 (図版7の4) 氷見市中波

女良漁港付近、西方に向かって傾斜している山裾に立地する。標高は約10mを測る。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(豊田恒一郎)

(5) 一夜城跡 (図版8の5、氷見市遺跡地図第2版2) 氷見市中波

下田川下流左岸、海岸に面した丘陵上に立地する。標高は約50mを測る。過去に滑石製義齒が採集されている（氷見市教育委員会 1984）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(山下 研)

(6) 魟ヶ島遺跡 (図版8の6、氷見市遺跡地図第2版3) 氷見市姿字浜898

氷見市姿地区の沖合約1kmに浮かぶ虻ヶ島に所在する。島は外周約440mのひょうたん形を呈し、長軸は北北東を指す。東側は男島またはタブノキ島、西側は女島またはマツノキ島と呼ばれる。過去に繩紋時代の土器と石器が採集されている。その中には繩紋時代中期から後期の磨製石斧がある（大野 1992）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(7) 九殿浜遺跡 (図版8の7、氷見市遺跡地図第2版3) 氷見市姿字九殿

市中心部から北へ約10km地点、東に海を臨むやや開けた平地に立地した製塩遺跡である。昭和50年に発掘調査が実施された。その際、7世紀代の能登式製塩土器である棒状尖底部が約30点、土師器と須恵器が数点出土している（氷見市教育委員会 1975）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(猪狩俊哉)

(8) 長坂ソウト遺跡（図版9の8、氷見市遺跡地図第2版126）氷見市長坂字山田ソウト
石動山から南東方向に伸びる緩傾斜の丘陵上に立地する。標高は約160mを測る。過去に人骨が納められた珠洲甕2点と宋錢、五輪塔が確認されており、中世墓と考えられる（氷見市教育委員会 1984）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。 (山下研)

(9) 長坂行塚遺跡（図版9の9、氷見市遺跡地図第2版218）氷見市長坂

下田川中流左岸、丘陵裾部に立地する。標高は約40mを測る。北北西方約500mの地点に先の長坂ソウト遺跡が位置する。

塚は直径約25m、高さ約8mの円墳状である。頂部には平面方形に円碟を積み、その中心部分に立石を施す。過去に珠洲や板石塔婆などが確認されている（氷見市教育委員会 1984）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。 (小泉史恵)

(10) 長坂貴船遺跡（図版9の10、氷見市遺跡地図第2版10）氷見市長坂字前田

下田川が形成した小浸食谷の舌状台地上に立地する。標高は80～90mを測る。昭和36年の圃場整備の際に発見され、昭和56年に試掘調査が行われた。このとき出土した縄紋土器片及び石錐、磨製石斧、打製石斧、削器、石錘等から、縄紋時代中期後葉から後期初頭にを中心とすることがわかっている。また、遺跡北側には県指定文化財である「長坂のオオイスクス」がある。現在、このオオイスクスの水源地確保もかねて保護措置がとられ、遺跡の一部が現状保存されている（氷見市教育委員会 1982）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。 (新宅由紀)

(11) 八代仙岩屋跡（図版10の11）角間字八代仙

宇波川上流、石動山に連なる山腹に立地する。標高約200mを測る。石川県鹿島郡鹿島町に二角点を持つ石動山を祀る近世の山岳信仰遺跡であり、石動山の神領域の南端に位置する。間口10間、奥行5～6間の洞窟内には、不動尊が鎮座している（石動山文化財調査団他 1989）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。 (猪狩俊哉)

(12) 大境洞窟遺跡（図版11の12、氷見市遺跡地図第2版）氷見市大境

市中心部から北へ約10kmの地点、海岸に面した丘陵裾部に開く洞窟内に位置する。洞窟遺跡においては日本で最初の発掘調査として名高い。現在は国指定史跡となる。

洞窟の存在が最初に文書に記されたのは江戸時代で、宝暦十四年（1764年）の調書、越中志徵に「大境村領海切岸有夷行拾六間口之三丈程此内二間四方之菊理姫申伝候住居候様子有…」という記述が見られる。また、洞窟内には約180年前より白山神社が祀られている。

発掘のきっかけは、大正7年に白山神社が改築された際、土器や石器などとともに多数の人骨が発見されたことによる。洞窟は入口の高さ9.5m、幅約17.0m、奥行き約34.0mを測る。奥部には湧水がある。調査によって、6層からなる文化層が認められた。層位ごとの出土遺物は以下のとおりである。

第一層 近世の陶磁器、鉄製小刀、竹細工

第二層 須恵器、金属器

第三層 古墳時代の須恵器と土師器、獸・魚骨、貝殻、人骨

第四層 赤生土器、獸骨、貝殻

第五層 弥生土器、石器（石包丁、石棒など）、骨角器、貝輪、獸・魚骨、貝殻、人骨など

第六層 繩紋土器、敲石、獸・魚骨、貝殻

縄紋土器は中期から晩期にかけてのものである。溝状の沈線紋や磨消縄紋を施す晩期のものが目立つ。また、第五層の石棒は大型で玉だき三叉文が刻まれている。

赤生土器には工字文、条痕文などをもつ中期初頭の柴山出村式のものがある。また、庄内式段階に位置付けられる月影式の上器も多く出土している。

遺跡からは多数の人骨が発見されている。それによって、発掘当初から遺跡の性格について墓跡とするか住居跡とするか議論されている。墓域とする説は、洞窟が横穴墓として利用される例が他に存在し、入口の向きが他の例と同じ南向きであること、赤彩される人骨があることなどを最大の理由とする。住居域とする説は、人骨とともに多数の土器が出上しているため岩盤の崩壊によって形成されたと考える方が自然だとしている（柴田 1918、藤田 1990）。

今回実測・記述した資料は水見市教育委員会から提供を受けたもので、全て縄紋土器である。

19は、深鉢の胴部であり、中期中葉後半、古府式に位置付けられる。胎土には砂礫を含んでおり、色調は内外面ともに褐灰色、断面については灰色を呈する。焼成は良好である。

20は、深鉢の胴部であり、後期前葉、前田式に位置付けられる。胎土には砂礫が混じっており、色調は外面がにぶい黄橙色、内面は黒色を呈する。焼成は良好である。

21は、浅鉢の口縁部付近であるが、口縁部は欠損している。時期は後期後葉、八日市新保式に位置付けられる。外面に連続三叉文が施されている。胎土には砂礫が混じっており、色調は外面が黒色、内面は黄褐色を呈する。焼成は良好である。

22は、深鉢の胴部であり、晩期に位置付けられる。この遺物は、外面に撚糸紋が施されている。また、混人物として海綿骨針が含まれる。胎土には砂礫が混じっており、色調は外面が灰白色、内面は黒色を呈する。焼成は良好である。

23は、浅鉢の胴部であり、後晩期に位置付けられる。胎土には砂礫が混じっており、色調は外面がにぶい桜色、内面は橙色を呈する。焼成は良好である。

24は、深鉢の口縁部であり、晩期中葉、中葉II式期に位置付けられる。この遺物は、口縁部に「く」の字型の屈曲を持つが、胴部になるほど屈曲は緩やかになっている。胎土には砂礫を含んでおり、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。焼成は不良である。

25は、深鉢の胴部であり、時期不明である。この遺物は、胴部に斜繩紋が施されている。胎土には砂礫を含んでおり、色調は外面がにぶい黄褐色、内面は褐灰色を呈している。焼成は良好である。

26は、深鉢の胴部であり、時期不明である。この遺物は、胴部外面に単節R L繩紋が、内面には横ナデ調整が施されている。胎土には砂礫が混じり、色調は内外面共に灰色を呈する。焼

成は良好である。

(遊佐真一郎)

⑩ **斐塚** (図版11の13) 水見市小境

夕日神社から西へ約200m地点、北西から南東に張り出した丘陵裾部に立地する。標高は約10mを測る。高さ約1m、一辺が約3.5mの平面方形の塚である。頂部には正面東向きの碑が立っている。石材は砂岩であり、碑の高さ1.8m、最大厚0.6m、幅下部1.0m、上部0.45mを測る。正面は滑らかに磨かれた平面となっており、上部には直径0.45mの円輪とその中に釈迦如来を表す種字が刻まれている。円輪の下部には“貞和三年 十五日”的刻銘(1347年)が見える(水見市教育委員会 1984)。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

⑪ **脇方十三塚遺跡** (図版11の14、水見市遺跡地図第2版135) 水見市脇方・小境

宇波川下流左岸、丘陵頂部に立地し、標高は40~50mを測る。遺跡内には今藏神社が鎮座している。マウンド状の高まりが確認されていて、古墳の可能性も否定できない。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(小栗山希代)

⑫ **脇方谷内出中世墓** (図版11の15) 水見市脇方

宇波川下流左岸、丘陵斜面に立地する。標高4~20mを測る。遺跡内には石仏、石塔、板石塔婆などが多数存在するが、ほとんどは原位置を保っていない(水見市教育委員会 1984)。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(小泉史恵)

⑬ **脇方横穴群** (図版11の16、水見市遺跡地図第2版6) 水見市脇方丑ヶ端

国道160号線灌浦トンネル周辺から北東に向けての丘陵斜面に立地する。標高は8~15mを測る。これまでの調査によって8基の横穴墓が確認されており、7世紀から8世紀にかけての土師器杯、須恵器杯、須恵器平瓶、鉄刀2点あるいは3点、菅玉4点、切子玉4点、人骨、中世土師器、近代陶器、銅錢が出土している。被葬者は製塙等によって勢力をつけた灌浦地域の有力家族と考えられている(水見市教育委員会 1989)。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(山本教幸)

⑭ **戸津宮中世墓** (図版12の17、水見市遺跡地図第2版217) 水見市戸津宮

宇波川中流域右岸、白河城跡が所在する丘陵北端に立地する。標高は約60mを測る。過去に14世紀から15世紀にかけてのものと見られる珠洲の破片が採集されている(石動山文化財調査団他 1989)。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(遊佐真一郎)

⑮ **白河城跡** (図版12の18、水見市遺跡地図第2版13) 水見市白河字崎出

白川と宇波川との間、丘陵頂部から一段下がった緩斜面に立地する。標高は75~150mを測る。能登の「得田氏軍忠状」に、「延文4年(1359)吉見刑部少輔の軍勢が越中国前守護井上入道暁悟を討伐することになり、同年7月18日、長坂口から侵入して白河城を落とした」と記されている。付近には、「百間馬場」「城ヶ谷内」「城ヶ窪」「馬場」「古城」「馬返し」「死ヶ谷内」「おばたけ」等の地名があり、それにまつわる伝説も伝わっている。昭和58年度の調査では平坦面が確認さ

れており、上記の「百間馬場」と推定されている（水見市教育委員会 1984）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

（山下 研）

(19) 宇波ヨシダ遺跡（図版12の19）

今回新たに発見した遺跡である。宇波川下流左岸の平野部に立地する。標高は約15mを測る。遺跡東側には、熊野神社古墳群が隣接する。

採集した遺物は古墳時代の土師器2片、中世の越前1片、產地不明の瓷器系陶器1片である。そのうち1点を図示した（図版3の4）。

4は瓷器系陶器壺である。胎土は密であり、色調はにぶい還色を呈する。焼成は良好である。

（山本教幸）

(20) 熊野神社古墳群（図版12の20、水見市遺跡地図第2版112）水見市宇波吉田567

宇波川中流左岸、丘陵裾部に立地する。標高は約20~30mを測る。遺跡南東側には熊野神社が隣接する。古墳群中の1基は中世墓と推定されているが、詳細は不明である。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

（田中洋一）

(21) 橋鉢神社遺跡（図版12の21、水見市遺跡地図第2版111）水見市白川

白川と宇波川との間、丘陵裾部に立地する橋鉢神社境内に位置する。標高は30m~40mを測る。同丘陵上には白河城跡が立地する。過去に石斧と石鎌、縄紋時代後期の土器が採集されている。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(22) 宇波高坂遺跡（図版12の22、水見市遺跡地図第2版161）

宇波川下流右岸、丘陵斜面に立地する。標高は約100mを測る。炭焼窯と推定されているが、詳細は不明である。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

（葛川貴祥）

(23) 宇波コウラウラ遺跡（図版13の23）水見市宇波

今回新たに発見した遺跡である。宇波川下流域右岸の平野部に立地する。標高は約13mを測る。遺跡南側には宇波庚申塚が隣接する。

採集した遺物は須恵器1片、珠洲2片、肥前系磁器1片である。そのうち3点を図示した（図版3の1~3）。

1は須恵器壺の体部である。外面は平行叩き後カキ目調整を施す。内面には同心円当て具痕が残る。胎土は密であり、2mm以下の砂粒が混じる。色調は青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

2は珠洲壺の体部である。外面には3cm幅で8条の叩き目を残す。内面には当て具痕がみとめられる。胎土は密であり、1mm以下の砂粒が混じる。色調は外面灰色、内面灰白色を呈する。焼成は還元硬質である。

3は珠洲すり鉢の口縁部である。吉岡編年の珠洲Ⅳ期に属する（吉岡 1994、以下珠洲編年はこれに準拠する）。口径は約33cmを測る。内外面ともにロクロナデ調整を施す。内面には

1.5mm幅の鉢目が5本確認できる。胎土は粗く、3mm以下の砂粒が混じる。色調は灰白色を呈する。焼成は還元軟質である。

(豊田恒一郎)

24 宇波庚申塚（図版13の24、水見市遺跡地図第2版7）水見市宇波

宇波川下流右岸の丘陵裾に位置し、標高は約10~30mを測る。現在は闇場として利用されており、詳細は不明である。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(田中洋一)

25 宇波古墳（図版13の25、水見市遺跡地図第2版8）水見市宇波、宇波神社境内

宇波川下流右岸に位置する。現在は平地となるが、当時は丘陵末端の尾根上に存在していた。標高は現状で約5mを測る。墳丘は明治33年の宇波神社の改築工事によって消滅した。その際の出土品として直刀や須恵器の提瓶、鰐が出土している。また、神社の北隣に太刀塚と称して、出土した人骨を改葬し石室の一部とおぼしき石3個を立て並べている（富山県立水見高等学校歴史クラブ 1964）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

26 宇波洞穴（図版13の26、水見市遺跡地図第2版136）水見市宇波一石山

市中心部から北東へ約7km、有磯海沿岸の岩壁面に開く洞穴内にある。標高は約20mを測る。過去に土器片が出土しているが、詳細は不明である。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(澤野慶子)

27 泊洞穴（図版13の27、水見市遺跡地図第2版9）水見市小杉

市中心部から北東へ約6km、富山湾に面した岩壁面の標高約5m地点に立地する。遺跡の近辺には国道160号線が走る。大境洞窟はここから北東へ約3.5kmの地点にある。

1967年、国道160号線鋪設工事中、洞穴内から鍾乳石の付着したヒト頭蓋が発見された。分析の結果、人骨は完新世前期から更新世末期に属すると判明し、旧石器時代の人類のものである可能性も示唆された。調査の余地を残しているとして結論は出されていない（小片・加藤・六反田 1989）。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

28 小杉谷内遺跡（図版13の28）水見市小杉

泊洞穴から南西へ約250m地点、有磯海沿岸の狭い平坦地に立地する。遺跡範囲内に菊理媛像石神社があり、境内から過去に土師器が採集されている。それによると、古墳時代の遺跡と推定される。しかし遺物量がわずかため、詳細は不明である。今回の調査において土人形片を2点採集し、これを図示した（図版5の5、6）。

5、6は近世の土人形基部である。胎土は密で海綿骨針を含む。色調は表面浅黄橙、断面灰色を呈し、焼成は不良である。

(新宅山紀)

29 泊馬當遺跡（図版14の29、水見市遺跡地図第2版160）水見市泊

萩田大池から北北東へ約280m地点、段丘中程の平坦面に立地し、標高は約83mを測る。塚とされるが、詳細は不明である。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(小栗由希代)

(3) 萩田遺跡 (図版14の30, 氷見市遺跡地図第2版114) 氷見市萩田竹の越

有磯海沿岸から北へ約400m入った平野部に立地し, 標高約5mを測る。過去に縄文土器, 須恵器, 土師器が出土した。

今回の調査において採集した遺物は縄文土器1片, 不明陶器1片, 時期不明遺物2点である。

(山本教幸)

(3) 萩田薬師遺跡 (図版14の31, 氷見市遺跡地図第2版144) 氷見市萩田字薬師

萩田漁港から北東へ約300m, 丘陵南側斜面に立地する。標高約20mを測る。遺跡北西側には, 先述の萩田遺跡が隣接する。遺跡は古墳時代後期から古代にかけての横穴墓で, その内1基は中世墓として再利用されたものである。3基が確認されている。過去に須恵器10片, 中世の石造物, 宋銭13枚, 土師器皿約60点, 鉄釘2点, 鉄刀2点, 鉄錐, 火葬骨などが出土している(北陸中世土器研究会 1997・氷見市教育委員会 1985)。

今回の調査において遺物は採集できなかった。

(澤野慶子)

(3) その他の採集遺物 (図版3と4)

遺跡範囲外の採集品についても, 将来的な遺跡発見の可能性を高めるため, すべての採集地点を記録している(図版7~14)。これらの内, 主なものについて示す。

7は古墳時代の土師器甕の口縁部である。口径は約14.5cmを測る。胎土は密であり, 1mm以下の砂粒が混じる。色調は浅黄橙色を呈し, 焼成は良好である($x = -14$, $y = 99.5$)。

8は須恵器杯類の口縁部である。9世紀代のものと思われる。口径は12cmを測る。胎土は密である。色調は灰色を呈し, 焼成は還元硬質である($x = -12$, $y = 102$)。

9は古代の須恵器壺の体部である。内外面ともに3cmにつき8条の平行叩き目が残る。胎土は密である。色調は内外面黒褐色, 断面灰黄褐色を呈し, 焼成は酸化硬質である($x = -14$, $y = 102$)。

10は青磁碗の底部であり, 龍泉窯系B3類に属すると思われる。底径は4.5cmを測る。全面施釉後, 線刻蓮弁文を施し, 肥付に釉剥ぎを行う。釉調は緑灰色である。見込部分は露胎であり, 印花文を施す。胎土は密で, 断面の色調は灰白色を呈する。焼成は良好である($x = -14$, $y = 102$)。

11は珠洲壺の体部破片である。吉岡編年の珠洲Ⅱ~Ⅲ期に属する。外面に3cm幅につき13条の叩き目を施し, 肩部ではその叩き目をナデ消す。内面に当て具痕が残る。胎土は密で, 1mm以下の砂粒が混じる。色調は灰色を呈する。焼成は還元硬質である($x = -14$, $y = 102$)。

12は近世の越中瀬戸皿の底部である。底径は5cmを測る。内面に灰釉を施すが, 見込み部分が露胎の内壳皿であり, 体部との境に釉止め段が認められる。また, 見込み部分に印花文の押印らしきものを確認できるが, 残存部分が微少であるため断定はできない。削り出し高台である。胎土は密で, 色調は内外面明赤褐色, 底面淡橙色を呈する。焼成は良好である($x = -14$, $y = 99.5$)。

13は近世の越中瀬戸壺の口縁部である。口径は約10cmを測る。内面に模様施す。内外面ともに鉄釉を施す。外面には自然釉がかかる。胎土は密で、1.5mm以下の砂礫が混じる。色調は浅黄色を呈する。焼成は良好である（ $x = -13.5$, $y = 104.5$ ）。

14は肥前系磁器の広束碗の底部である。18世紀末～19世紀のものと考えられる。底径は約5.5cmを測り、明緑灰色の釉を施す。胎土は密で、色調は灰白色を呈する。焼成は良好である（ $x = -15$, $y = 104$ ）。

15は肥前系磁器碗の口縁部である。口径は約9cmを測る。明緑灰色の釉を施す。内面に草木文と考えられる文様を描く。胎土は密で、色調は灰白色を呈する。焼成は良好である（ $x = -15.5$, $y = 100$ ）。

16は中世の低石で、粗砾もしくは中砾と考えられる。現存最大長8.2cm、最大幅3.5cm、最大厚3.0cmを測り、重量約115gである。石材は灰色の硬質砂岩である。総面を使用している。小口には、表裏2面より切出しの工具を入れ最後を折り取るという成形時の加工痕が残る（ $x = -14.5$, $y = 104$ ）。

17は寛永通寶である。比較的残りがよく、裏面に「文」の文字が残ることから、文錢と考えられる（ $x = -14.5$, $y = 102$ ）。

18は金銅製の小錠である。時期は不明である。器高4.1cm、直径4.3cmを測り、重量約45gである。全体を緑青が覆っている。下部に3孔を穿つ（ $x = -14.5$, $y = 104$ ）。

(小栗山希代・新宅山紀)

2 遺物の散布状態

今年度対象としたG地区は、市域北部の宇波川と下田川を中心とする。採集した遺物は縄紋時代から近世に至る43破片・口縁部0.71個体分である。遺跡および遺物採集地点の詳細は、前節において述べている。

本節では、これら採集資料を歴史資料として活用するために、遺物を時期別に大別、口縁部計測法と破片数計測法とによって個体数を計算し（宇野 1992），散布状態の傾向を示すことにする。時期別の総量は、縄紋時代が2片、弥生・古墳時代が6片・0.04個体分、古代が7片・0.3個体分、中世が9片・0.10個体分、近世が18片・0.27個体分である。また時期不明の遺物を1片採集した。なお本年度調査地区は水見市都市計画座標にあわせて国土座標X=138°59'55", Y=35°48'00"を原点とする1辺500mの方眼を設定し、その北東角の座標をグリッド名としている（第3図）。

(1) 縄紋時代遺物の散布状態（第5図）

縄紋時代の遺物は、畠田遺跡において2片の土器を採集した。

縄紋時代の遺跡は、今回の調査地区において6遺跡を確認している。

(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態（第6図）

弥生・古墳時代の遺物は、土器6片・0.04個体分を4グリッドから採集した。ここで弥生・

古墳時代の遺物としたのは、土器片から双方の分別をするのが難しかったからである。

確実に弥生時代の遺跡と言えるのは、大境洞窟遺跡のみである。

古墳時代と言える遺跡は、新規発見の宇波ヨシダ遺跡を含め8遺跡である。

今回の調査では、土器片5片を採集したが、4片は遺跡から採集したものである。

(3) 古代遺物の散布状態（第7図）

古代の遺物は、須恵器7片・0.3個体分を4グリッドから採集した。採集遺物の多くは宇波川下流域において採集した。

古代の遺跡は、新規発見の宇波コウラウラ遺跡を含め3遺跡を確認している。

(4) 中世遺物の散布状態（第8図）

中世の遺物は、珠洲5片・0.10個体分、越前1片、青磁1片、瓷器系陶器1片、砥石1点を5グリッドから採集した。中世になると、遺跡の分布は山間部にも広がっていき、調査区一帯に認められる傾向にある。

(5) 近世遺物の散布状態（第9図）

近世の遺物は、越中瀬戸2片・0.11個体分、瀬戸1片、近世陶器3片、近世磁器9片・0.16個体分、古銭1枚、土人形2片を11グリッドから採集した。

遺物量は他のどの時代よりも多く、かつ広範囲に分布している。

(6) 小 緒

各時期の遺物散布状態は以上の通りで、まとめると次のようになる。

G地区の遺跡分布の特徴は、丘陵部において中世遺跡、平野部と丘陵部裾において古墳時代から近世までの遺跡、そして海岸部に繩紋遺跡が分布する、ということである。

繩紋時代の6遺跡のうち大境洞窟遺跡・中波貝塚・泊洞穴の3箇所が海沿いに分布する。蛇が島遺跡は姿地区の沖合いに所在する。この地の人々が海岸部および沿岸部での漁労を生業にしていたことは想像に難くない。一方で、丘陵上もしくは丘陵裾にある長坂貢船遺跡や插鉢神社遺跡との立地の違いは、今後検討すべき課題である。また、当時の生活を知る上で、大境洞窟遺跡から出土した多量の土器や骨角器、獸骨などは重要な手がかりとなる。

古墳時代の遺跡は8箇所確認した。ただし、脇方横穴群や萩田薬師遺跡のような横穴墓は本来、古代の遺跡として扱うべきものである。しかしながら、古墳との関係を重視して、一応便宜的に古墳時代に含めて考えることにした。

宇波古墳、熊野神社古墳群は丘陵上または丘陵裾にある。また脇方横穴群と萩田薬師遺跡の横穴墓は丘陵斜面につくられる。これらは当時の墓制として、一般的な立地のあり方を示すと言えよう。注目したいのは、これらがいずれも海岸または河川に面してつくられていることがある。当時の海岸線は若干内陸に入り込んでいたと見られ、今以上に海や川との繋がりが大きかったと思われる。中小河川の河口付近や中流域につくられたこれら古墳と横穴墓は漁労活動や塙生産、水運との関係を考慮に入れる必要がある。

宇波ヨシダ遺跡と萩田遺跡は平野部に立地し、集落と見られる。前者は熊野神社古墳群と、

後者は萩田薬師遺跡と隣接して営まれる。

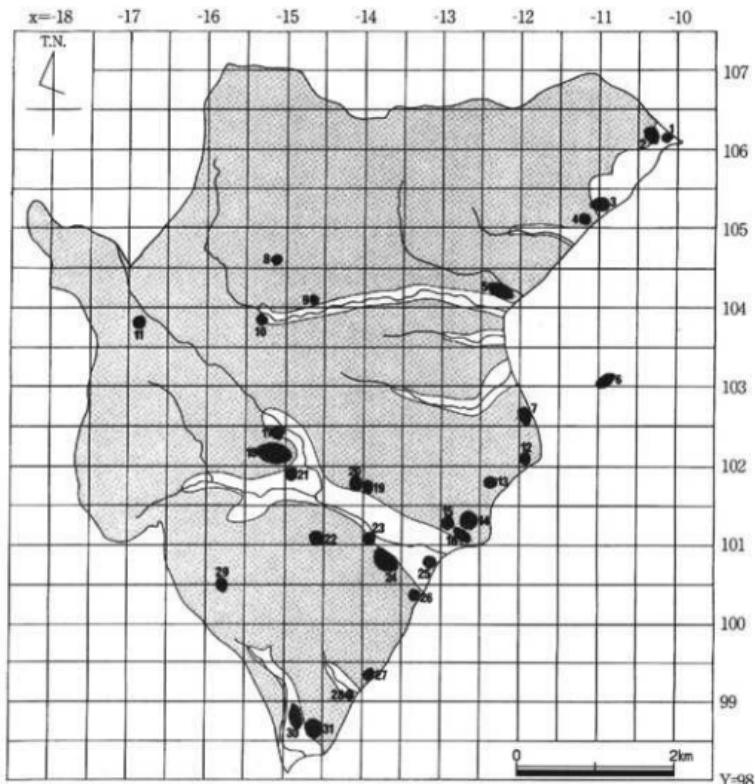
また、海岸部にある大境洞窟遺跡や小杉谷内遺跡は特殊な立地を示す。双方の性格と平野部集落との関係も今後は究明する必要があるだろう。

古代の遺跡は3箇所確認した。いずれも離れて存在しているが、このことから当時の人々の生活範囲が広がったと考えるのは難しい。九段浜遺跡は製塙遺跡で、過去の発掘において能登式製塙土器の棒状尖底部が出土した。

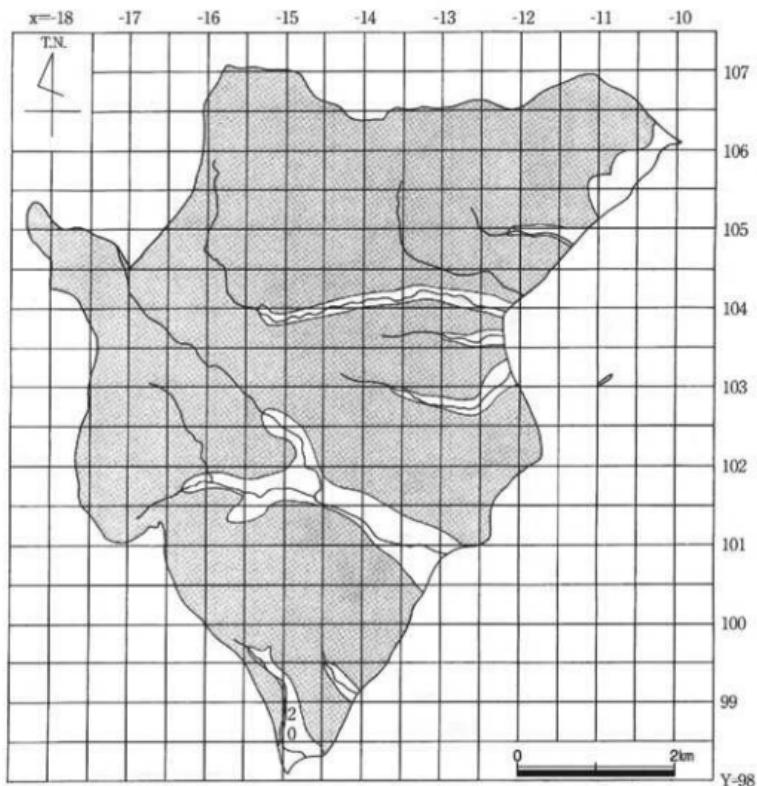
中世になると丘陵上に城、丘陵裾には中世墓がつくられ、調査区一帯に分布が広がっていく。これは石動山道の要衝であること、古戦場付近であったことを示している。

近世は採集した遺物の量も種類も多く、広範囲にわたっている。中世で増えた遺跡の周辺がさらに開発され、人々の生活の場が広がったためと考えられる。

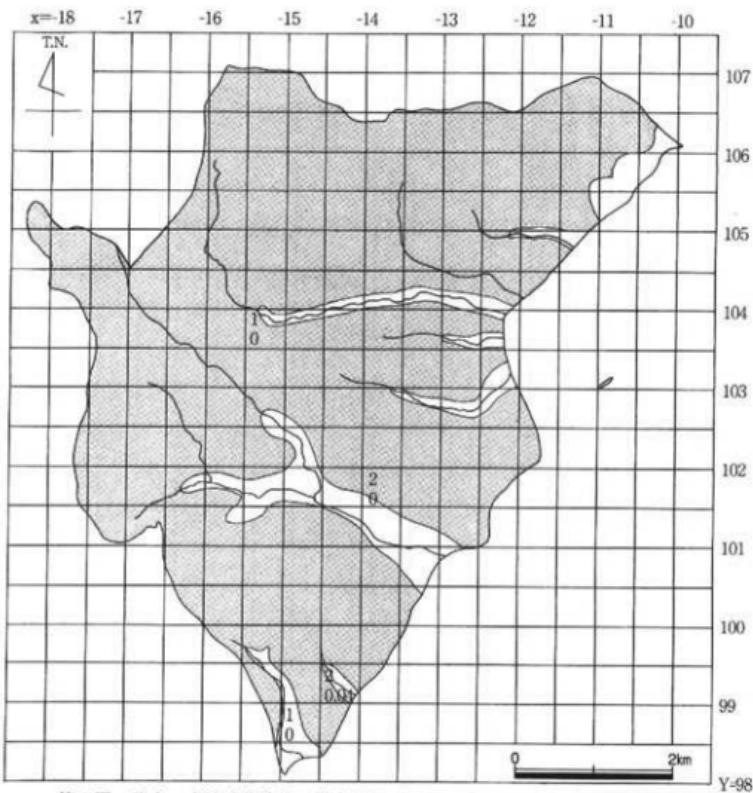
(猪狩俊哉・田中洋一)



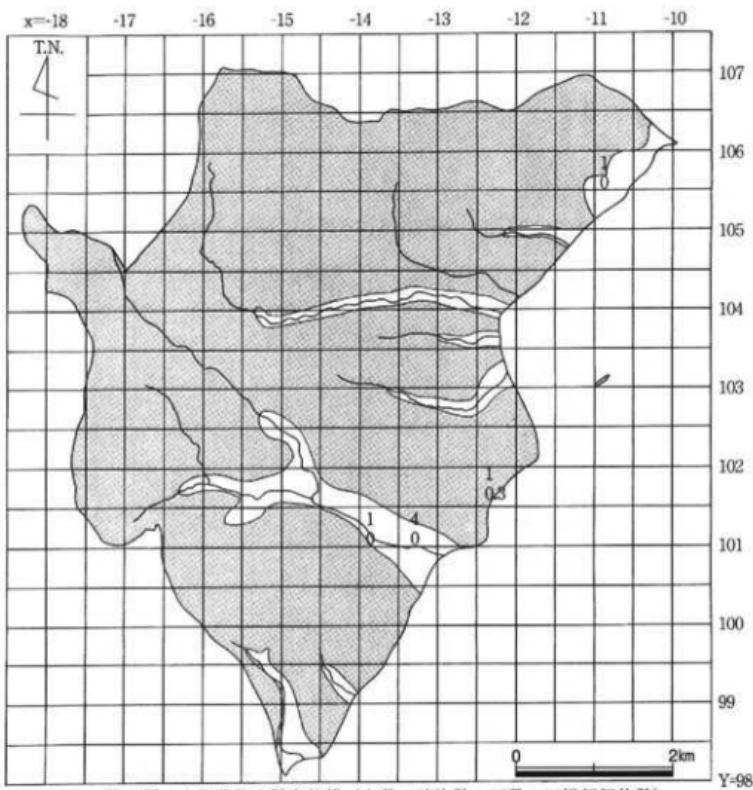
第4図 G地区遺跡分布図（遺跡名は図版7～14参照）



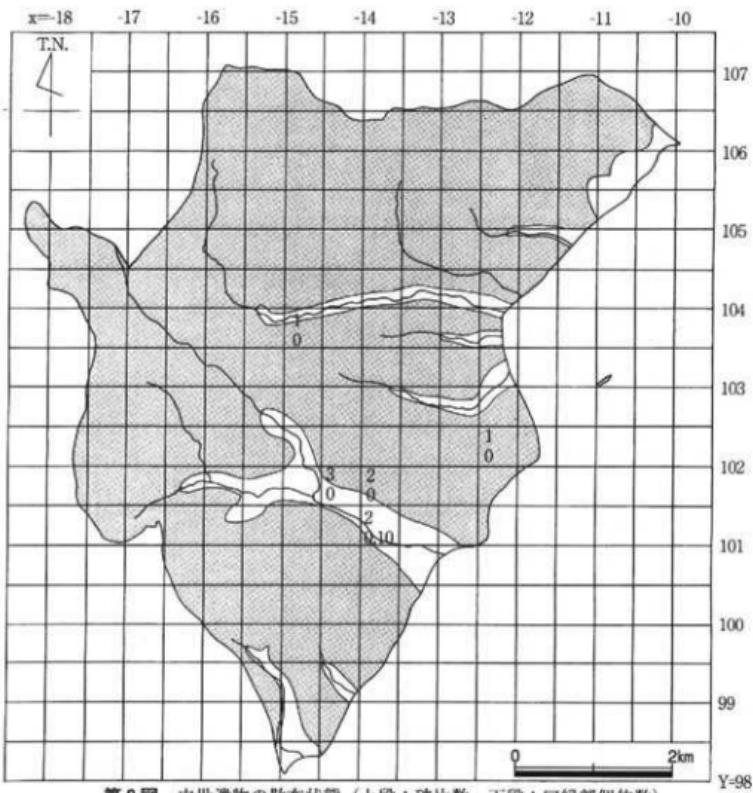
第5図 繩紋時代遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口緑部個体数）



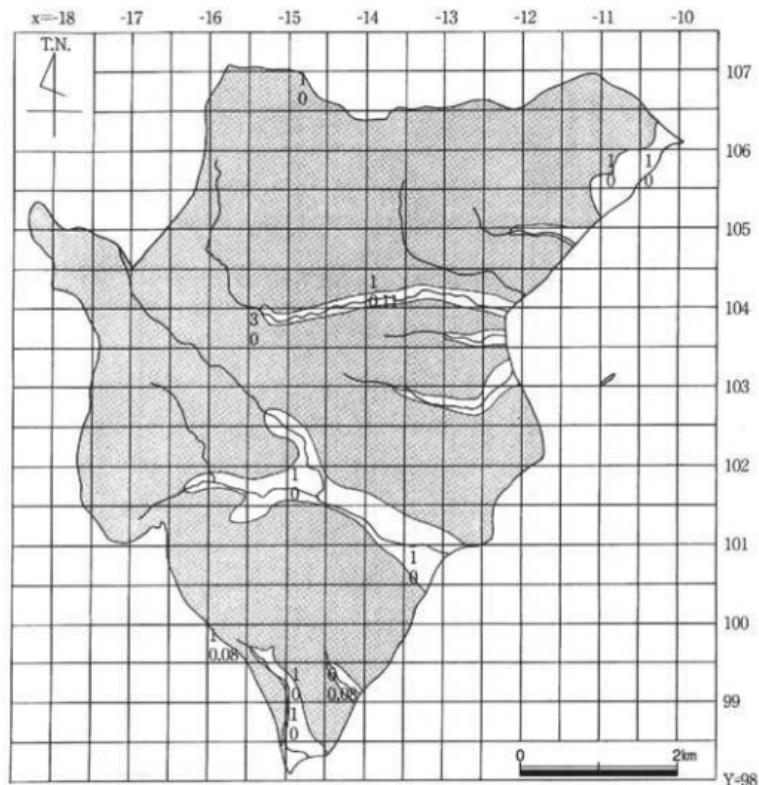
第6図 弥生・古墳時代遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



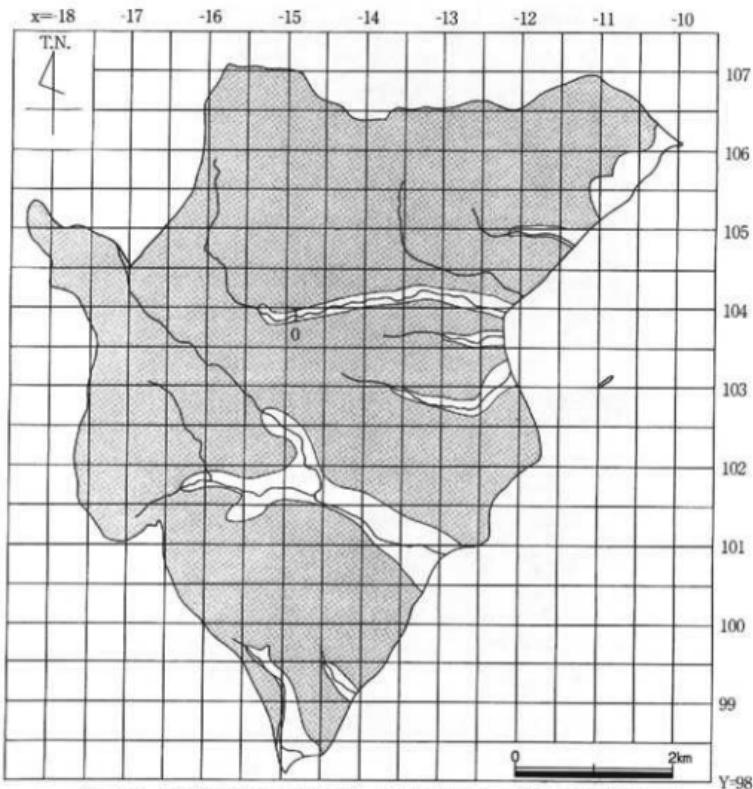
第7図 古代遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



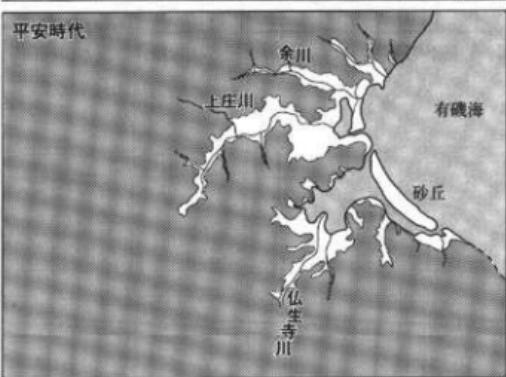
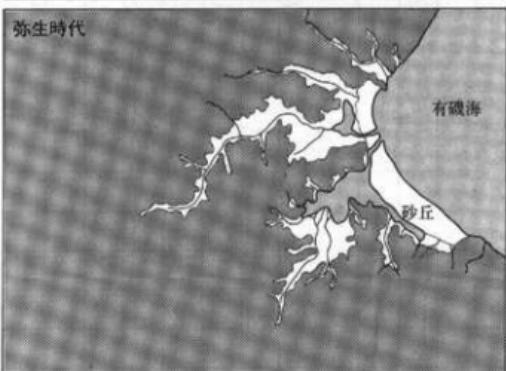
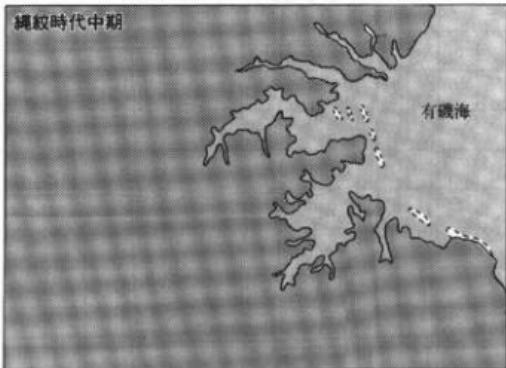
第8図 中世遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



第9図 近世遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



第10図 時期不明遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）



第11図 水見市の古地理図
(水見市史編さん委員会)
1999より加筆転載

第3章 おわりに

今回の調査をもって氷見市全域の埋蔵文化財詳細分布調査は終了した。過去7箇年の調査で新たに発見した遺跡は34を数え、その結果市内の遺跡総数は283となった。また、採集した遺物は4290点（25,904個体）にものぼる。以下では、これまでの成果によって判明した氷見市域の遺跡の変遷について、時代ごとにまとめてみたい。

現在までのところ市域に遺跡がはじめて現れるのは、縄文時代前期である。この時期はいわゆる縄文海進期にあたり、市平野部のほとんどは内湾であったと考えられている。遺跡は南部の砂丘地帯あるいはその周辺の丘陵部に立地する。多数の土器や人骨、そして日本初の堅穴住居が見つかったことでも著名な朝日貝塚もこうした立地環境にある。この貝塚は多少地点を移動しながら晩期まで継続する。

海退が始まる中期になると、遺跡数は丘陵部を中心に増加し、中期後葉の串田新式期にピークを迎える。しかし、まとまった遺物をもった遺跡が前期に比べて見つかっていない。これら遺跡数の急激な増加は、気候の変化に伴う生業形態の変化を表すのかもしれない。後期に入ると遺跡数は減少していく。晩期にはそれとともに、丘陵上に遺跡は営まれなくなり海沿いだけの分布となる。

各期を通じて海沿いに遺跡が絶えることはなく、富山湾の海産資源が本地域の生業の基礎をなしていたことは間違いないであろう。

弥生時代以降には、しだいに沖積地化がすすむ。南部にある平野部はこの頃、海退にともない形成された砂丘により、潟へと変貌した。この砂丘上では弥生土器も多数採集されている。丘陵や谷部においては遺物がほとんど散布していないことから、海辺の砂丘周辺が主要な生活の場であったと推察できる。

こうした様相は弥生時代後期終末頃に変化する。上庄川中流域の谷を見下ろす位置に小久米A遺跡をはじめとする集落が営まれはじめめる。それにより、海辺だけでなく丘陵部や谷口にも遺跡の分布が広がっていく。この時期の北陸では、遺跡が低地から平野奥部や丘陵部に広まるということが一般的であるようだ。なお、分布調査で採集した遺物のうち弥生時代としたものは、その大多数が弥生時代後期終末頃の資料である。

古墳時代になると、丘陵部や谷部での遺物散布量が再び減少する。平野部においても集落の動向は明確でない。一方、潟の縁辺部や谷に面した丘陵部には数多くの古墳が築かれるようになる。前期に属する柳田布尾山古墳は、全長107mを測る日本海側で最大の前方後方墳である。日本海における交易を掌握した「コシ」の王者とも目されているが、他の古墳との比較や生業基盤の解明など今後検討すべき課題が多い。

中期末から後期初頭には、朝日長山古墳が造営されている。全長約43mとみられる前方後方墳で、多くの鉄製品、金銅製品、須恵器、埴輪などが出土した。この時期における越中の有力

首長墓と考えられる。また、古墳時代中期以降、上庄川中流域の谷を見おろす丘陵上にも多くの古墳群がつくられている。上庄川中流域は後の之手路（志雄路）となるルート上にもなっており、交通路を意識して集中的に築いた可能性も多い。この時期には、須恵器窯もはじめて成立した。岡カンデ窯は渦に突き出た丘陵裾に立地する。陶器編年でTK47からMT15型式に位置付けられる須恵器が採集されている。

古墳時代後期になると余川下流域の平野部にも遺跡が営まれはじめると、丘陵上の遺跡を除いていざれも短期間で消滅する。北陸においては6世紀から7世紀初頭を境にして集落が断絶したり新たに成立することが多い（宇野 1994）。

当地域の古墳時代を理解する上で重要なのは渦の機能についてである。渦の重要性については多くの指摘がなされている。柳田布尾山古墳をはじめとした首長墓や数多くの群集墳、横穴墓などが渦の縁辺部やあるいは海岸沿いに位置することから、海や水運と深い関係をもつていただと考えられる。

古代前期においては、それまで希薄であった遺物散布が、谷口や谷・丘陵裾部を中心に丘陵上や低地部一帯にも広く確認できるようになる。分布の集中する範囲は、砂丘周辺や仏生寺川流域、上庄川流域、余川流域、阿尾川流域である。これらの地域は、それまで古墳や横穴墓が集中して営まれる地域とも重複している。また7世紀以降、それまでさほど顕著に利用されてこなかった丘陵斜面や海岸部において、製鉄や製塩、瓦専用窯などの生産遺跡が確認できるようになる。遺物や遺跡の広範な分布にも見られるように、この時期の開発は山野や河川をも含めて総合的におこなわれるものであったと推定される。そしてこれらの変化は、北陸で一般的にみられる状況とも共通することから、国家主導による施策であったと考えられる（北陸古代土器研究会 1989、宇野 1991）。

古代後期になると、散布する遺物の量は減少する。ただし、分布範囲は広がっており、山頂部でも少量の遺物が認められるようになる。この時期に比定できる遺跡の発掘例が僅かであり、具体的な様相は明らかではないが、集落や生産において古代前期とはやや質の異なる活動があったと推測したい。

中世および近世の遺跡数は、他の時代とも重複するものも含めると、168遺跡にものぼる。分布は丘陵上あるいは平地や海を望む丘陵の据部、さらには内陸の山間部へも広がっていく。

遺跡密度や散布状況を検討すると、特に渦湖や布勢水海周辺、上庄川下流域の丘陵上や丘陵裾部に集中している。文献によれば、上庄川流域には阿努庄が12世紀後半に、余川流域には余川保が13世紀頃に存在したと言われている（国立歴史民俗博物館 1995）。また、この地域は石川県穴水町方面へ至る浜街道と同じく羽咋市へ抜けれる能登街道（志雄路）とが交わる交通の要所でもあった。南部における資料の集中は、これら集落の開発や街道の整備と関わることは間違いないだろう。越中においては、12世紀中頃から後半に新開型集落と呼ばれる集落が出現し、15世紀後半から16世紀初頭に街道に沿って集村化が進み、阿尾城などの城館を中心として集落網を形成したと指摘されている（吉岡 1989、前川 1991）。北部に位置する阿尾城との

直接的なつながりは明確ではないが、中世集落の形成にあたっては南部地域が拠点の一つになったとみられる。

北部は、南部に比べて遺跡数こそ少ないものの、石動山（註1）に関する修驗道や信仰に関わる石仏や石塔などの石造物も多く残る。阿尾から白川を通り、石動山に至る大窪道（越中口）もその一つである。大窪道は越中側からの参詣者が通った道であり、石動山の表参道であった。市域の丘陵上や山脚部には多くの城館遺跡や山岳宗教遺跡がつくられている。白川城、宇波城、荒山砦をはじめとする城館遺跡や八代仙行場跡のような修行場跡など伝承や文献に残る遺跡も多い。

中世と近世の採集遺物には、在地産の土器と陶器のほかに中国製磁器、珠洲陶器、肥前系陶磁器などがある。7箇年の総計1132破片11,014個体となった。見多いと感じるが、遺跡数と比較して遺物の量は少ない。特に、中世の遺物が古代に比べて減少傾向にあることはこれまでも指摘されてきた（宇野ほか 1991・1992・1997）。土器・陶磁器減少の一つの要因として、縄炊を中心とする食生活の変化が安価な漆下地漆器と鉄鍋の普及を促し、食器様式の変化につながったと考えられている（四柳 1997、占岡 1997）。

ここで、今後の研究課題としていくつか記しておきたい。まず第一に、平野部における遺跡変遷の解明があげられる。第11回水見市の古地理図からもわかるように、海面の変動と沖積化によって、平野部には土砂が多く堆積している。そのため、地下には未発見の集落や存在がわかっていても未確認の時期の遺物が埋まっている可能性がきわめて高い。特に、現在の海水面とほぼ同じ高さに落ち着く中世よりも以前の遺跡については、このような傾向が強い。旧石器時代の遺跡がわからないのもこのためと考えられる。

また、都市部については、住宅やアスファルト敷きのため十分な踏査ができず散布状況の綿密な把握に至っていない。個人住宅建設に伴う調査やボーリング調査の実施によって、成果を補っていく必要があるだろう。

第二に、丘陵部における踏査の徹底である。周知の遺跡とその周辺については丹念に歩くことができた。しかし、山林や下草そして立地の都合上、山頂や谷、丘陵斜面についての調査はまだ十分ではない。こうした立地上には未発見の古墳や横穴墓、中世城館、山岳信仰関連の遺跡などが存在する可能性が高く、引き続き注意を要する。

最後に、水見市教育委員会と富山大学考古学研究室は7箇年にわたって、詳細な遺跡分布地図を作成するべく調査を行ってきた。それによって、平野部における遺跡や遺物の分布状況、丘陵部における周知の遺跡周辺の遺物分布状況については、ほぼ明らかにすることができた。またそれにともなって、問題点もいくつか浮上してきた。水見市における分布調査は今年度で最終となるが、課題を克服するべく今後とも詳細な遺跡の把握に努めていきたい。

（浅野良治・高志こころ・戸篠暢宏・中谷正和・前川要・高橋浩二・大野 究）

(註1) 石動山は、石川県鹿島町に位置し、古代から近世に至るまで北陸の代表的な山岳信仰

の地である。平安時代から南北朝時代にかけての布教活動により勢力を拡大したが、国司中院定清と結んだ石動山衆徒は武家方との戦に敗れ、建武2年に全山灰燼に帰している。その後、皇室や足利義満らの寄進により復興を遂げた（橋本 1984）。中世後期には能登守護畠山氏とのつながりも深く、神保氏と椎名氏の越中富山郷の支配をめぐる抗争にも積極的に介入したとされている（久保 1984）。

参考文献

- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫・宮田進一・酒井重洋・高梨清志・押川恵子 1991「越中」「城館遺跡出土の土器・陶磁器」北陸中世土器研究会
- 宇野隆夫・宮田進一・酒井重洋・高梨清志・森田智香子 1992「越中」「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」北陸中世土器研究会
- 宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1997「越中国における陶磁器の流通と組成」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会
- 大野 究 1991「大境洞窟遺跡発掘調査の周辺－測量図面紹介にあたって－」第9号
- 大野 究 1992「虻が島遺跡の考古資料」『永見市立博物館年報』第10号
- 大橋康二・西田宏子 1988「別晉太陽 古伊万里」平凡社
- 小片 保・加藤克知・六反田篤 1989「富山県水見市泊洞穴から出土した人骨の形質について」『人類学雑誌』第97巻3号
- 久保尚文 1984「越中における中世信仰史の展開（増補）」桂書房
- 柴田常忠 1918 「越中国水見郡宇波村大境の白山社洞窟」『人類学雑誌』第33巻第7号
- 国立歴史民俗博物館 1993「日本出土の貿易陶磁」西日本編2 国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書4
- 国立歴史民俗博物館 1995「日本莊園データ2（北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道・壱岐島）付：莊園関係文献目録」『国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書』6
- 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1996「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）」富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第7集
- 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1993「珠洲大崩窯」富山大学考古学研究報告第6号
- 富山県水見高等学校歴史クラブ 1961「故郷の城址」水見高校歴史クラブ報告書 No.10
- 富山県水見高等学校歴史クラブ 1964「富山県水見地方 考古学遺跡と遺物」水見高校歴史クラブ報告書 No.11
- 石動山文化財調査団・水見市教育委員 1989「国指定史跡石動山文化財調査報告書 一八代仙ダメ建設計画関連一」
- 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986「石川県能都町 真脇遺跡」
- 野々市町教育委員会 1983「野々市町 御経塚遺跡」

- 橋本芳雄 1984「石動山史の大要」『石動山信仰遺跡遺物調査報告書』氷見市教育委員会
- 氷見市教育委員会 1975『富山県氷見市 九殿製塙遺跡調査報告書』
- 氷見市教育委員会 1982『富山県氷見市 長坂貢船遺跡試掘調査報告書』
- 氷見市教育委員会 1984『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』
- 氷見市教育委員会・富山県砂防課 1985『富山県氷見市 萩田薬師中世墓発掘調査報告書』
- 氷見市教育委員会 1989『脇方横穴群 一般国道160号灘浦トンネル拡幅工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査』氷見市埋蔵文化財調査報告第10冊
- 氷見市教育委員会 1993『氷見市遺跡地図〔第2版〕』氷見市埋蔵文化財調査報告第14冊
- 氷見市教育委員会 1993『斐塚』『氷見の指定文化財ハンドブック』
- 氷見市教育委員会 1994『氷見市埋蔵文化財分布調査報告I』氷見市埋蔵文化財調査報告第16冊
- 氷見市教育委員会 1995『氷見市埋蔵文化財分布調査報告II』氷見市埋蔵文化財調査報告第17冊
- 氷見市教育委員会 1996『氷見市埋蔵文化財分布調査報告III』氷見市埋蔵文化財調査報告第20冊
- 氷見市教育委員会 1997『氷見市埋蔵文化財分布調査報告IV』氷見市埋蔵文化財調査報告第23冊
- 氷見市教育委員会 1998『氷見市埋蔵文化財分布調査報告V』氷見市埋蔵文化財調査報告第25冊
- 氷見市教育委員会 1999『氷見市埋蔵文化財分布調査報告VI』氷見市埋蔵文化財調査報告第27冊
- 氷見市史編集委員会・氷見市 1963『氷見市史』
- 氷見市史編さん委員会 1999「資料編七 自然環境」『氷見市史』9
- 藤田富士夫 1983『日本の古代遺跡』13富山 保育社
- 藤田富士夫 1990『古代の日本海文化 海人文化の伝統と交流』 中公新書
- 北陸中世土器研究会編 1997『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』 桂書房
- 前川 要 1991「中世集落の動向と流通機構の再編—越中における中心集落網に関する考察—」
『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 渋 晨 1966「氷見海岸の人文景観と文化財」『氷見海岸二上山学術調査書』
- 吉岡康暢 1989「日本海域の土器・陶磁 中世編」『人類史叢書』10 六典出版
- 吉岡康暢 1994「中世須恵器の研究」 古川弘文館
- 吉岡康暢 1997「補論 瓢と皿」『国立歴史民俗博物館研究報告—中世食文化の基礎的研究』
[国立歴史民俗博物館]
- 四柳嘉章 1997「北陸の漆器考古学—中世とその前後—」『第10回 北陸中世土器研究会記念
特集号』第1分冊 北陸中世土器研究会

図 版

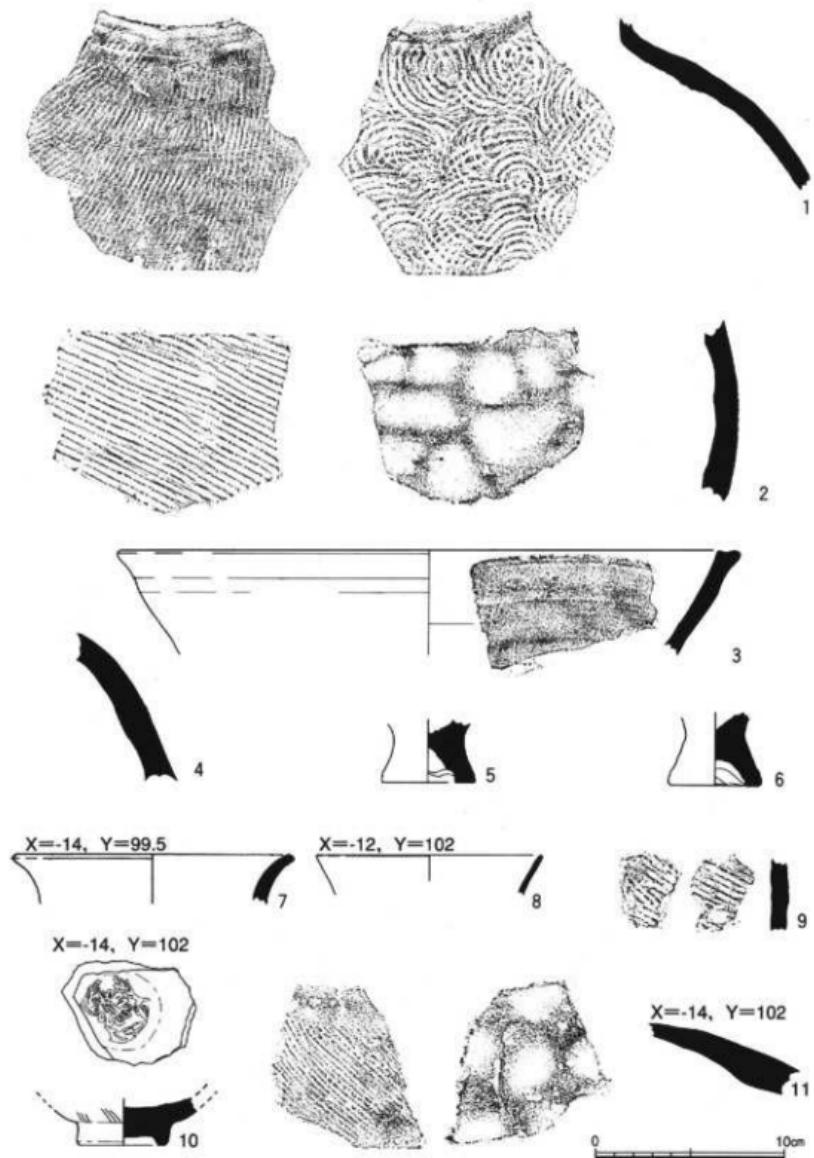


1947年撮影（縮尺 1/62,500）

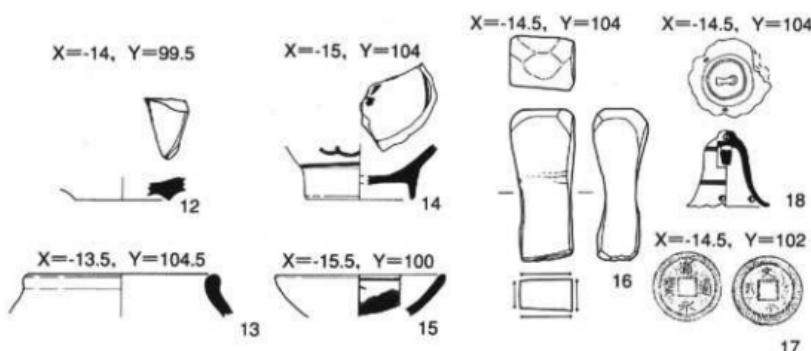
図版二 G 地区の航空写真 (11)



1992年撮影 (縮尺 1/62,500)

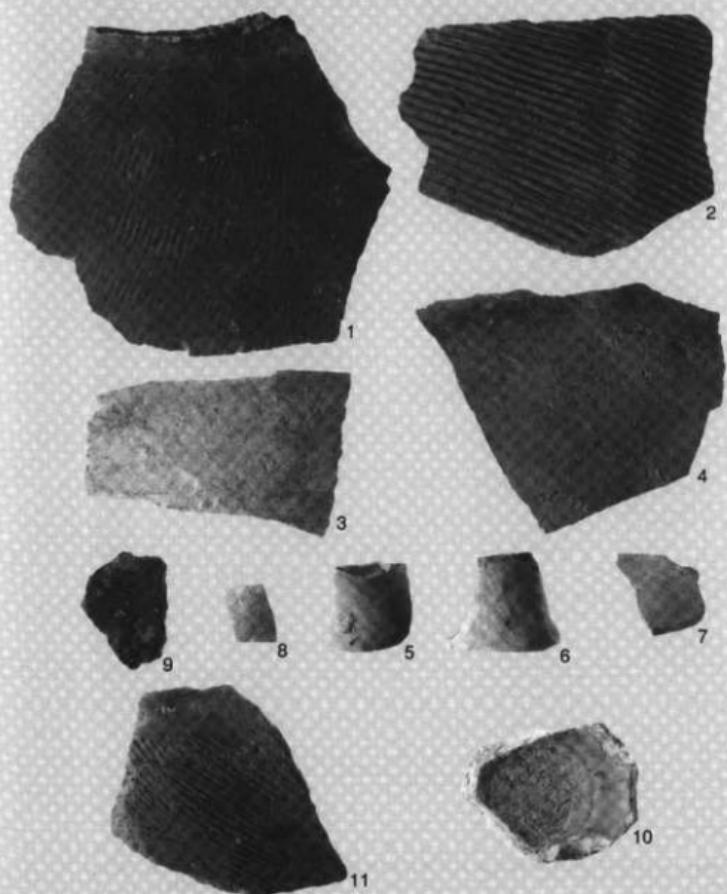


1～3 宇波コウラウラ遺跡, 4 宇波ヨシダ遺跡, 5～6 小杉谷内遺跡, 7～11 遺跡範囲外採集品
(縮尺: 1/3)

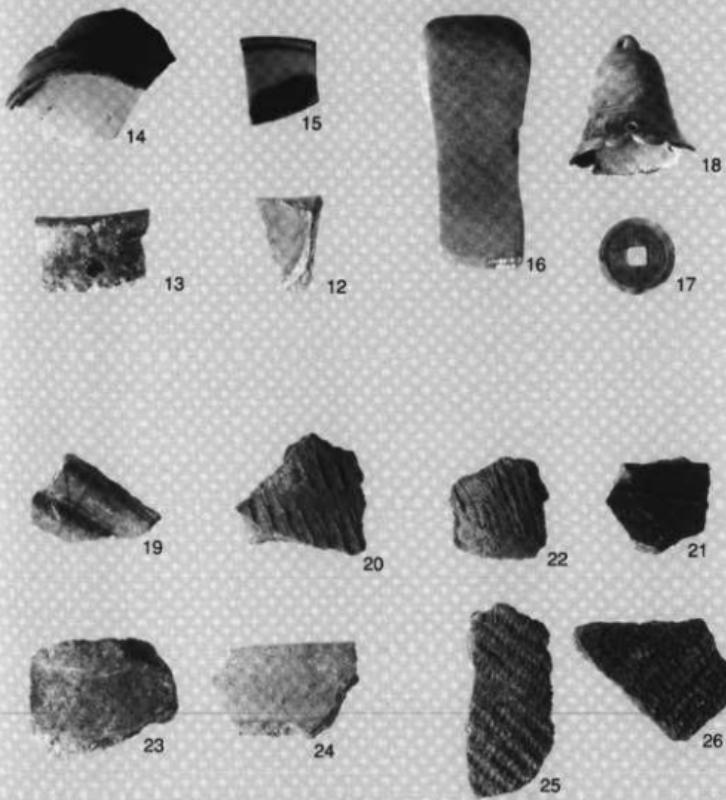


0 10cm

12~18 遺跡範囲外採集品, 19~26 大境洞窟遺跡 (縮尺: 12~16, 18~26 1/3, 17 1/2)

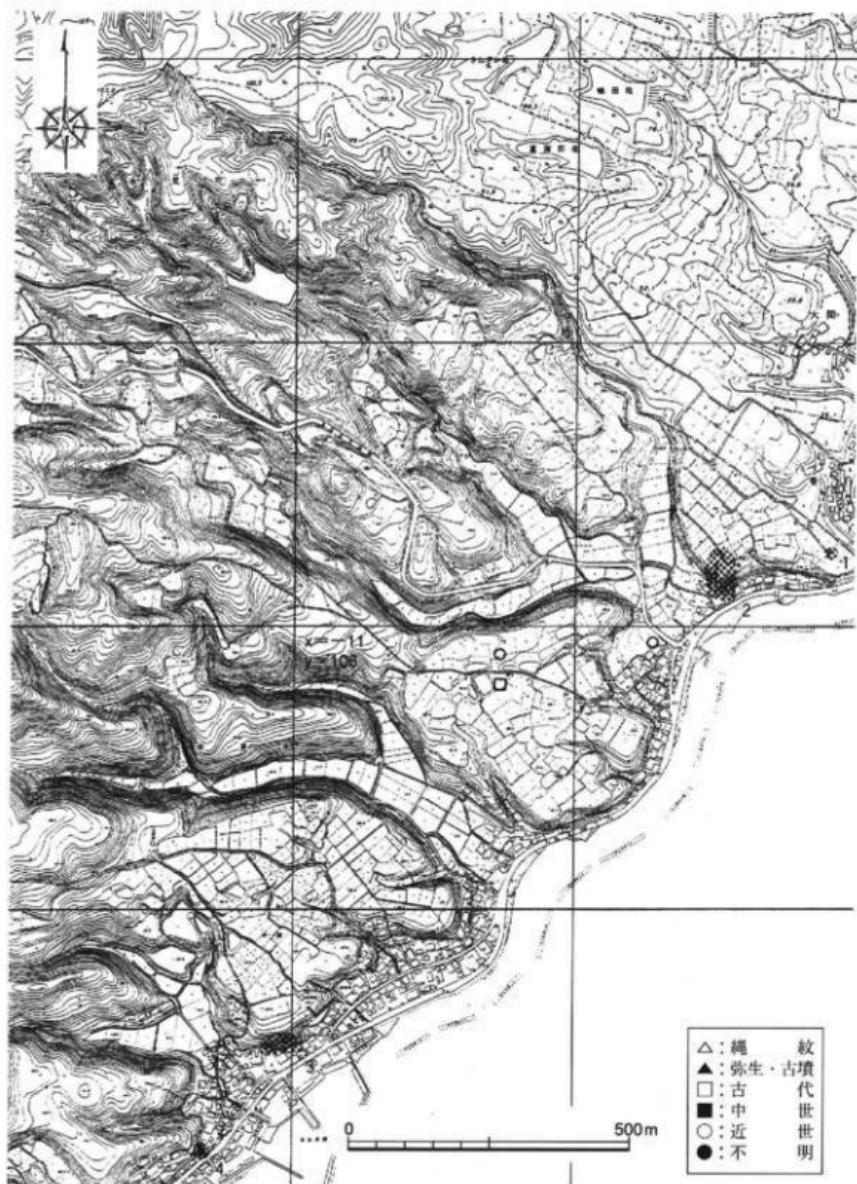


（圖版3 參照）



(図版4 参照)

図版七 G 地区の遺跡と遺物採集地点(二)



1 脇境塚
2 脇中世墓
3 中波貝塚
4 中波天神の森遺跡

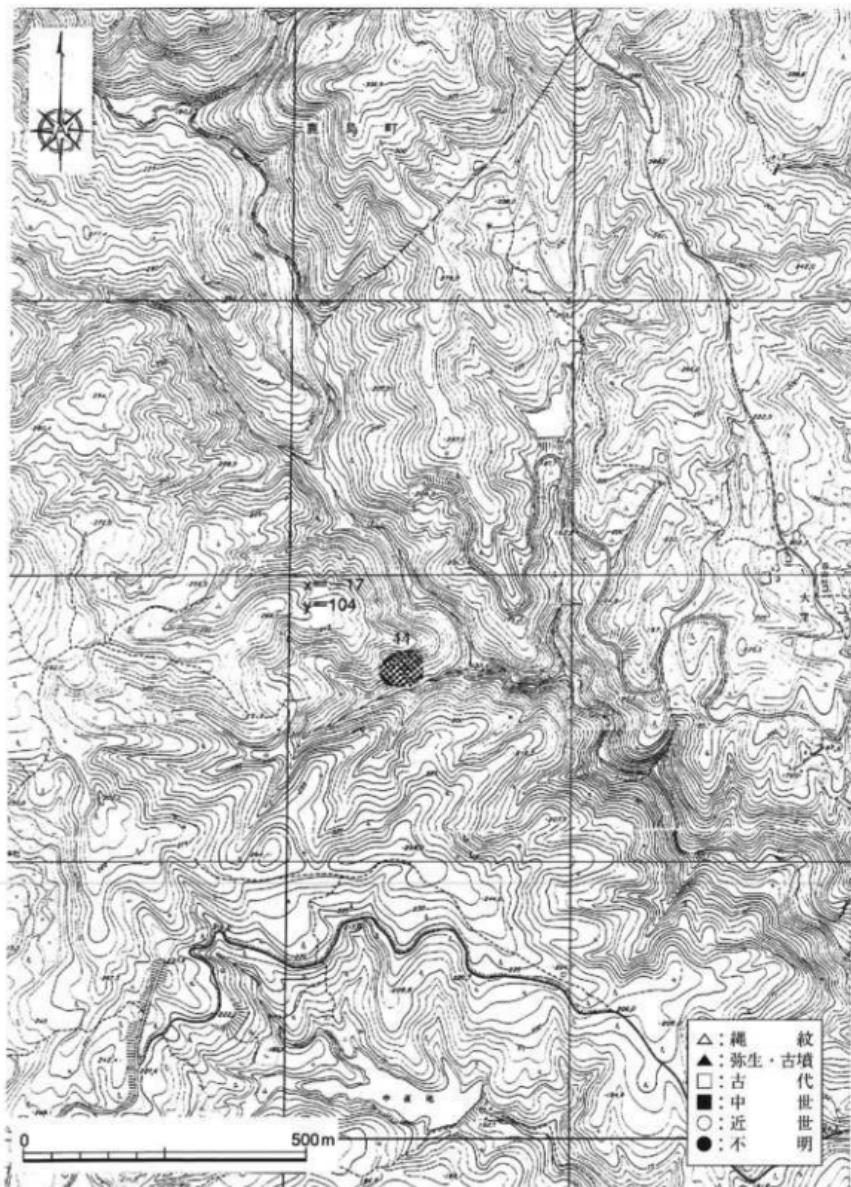
(縮尺 1/10,000)

図版八 G 地区の遺跡と遺物採集地点 (一)





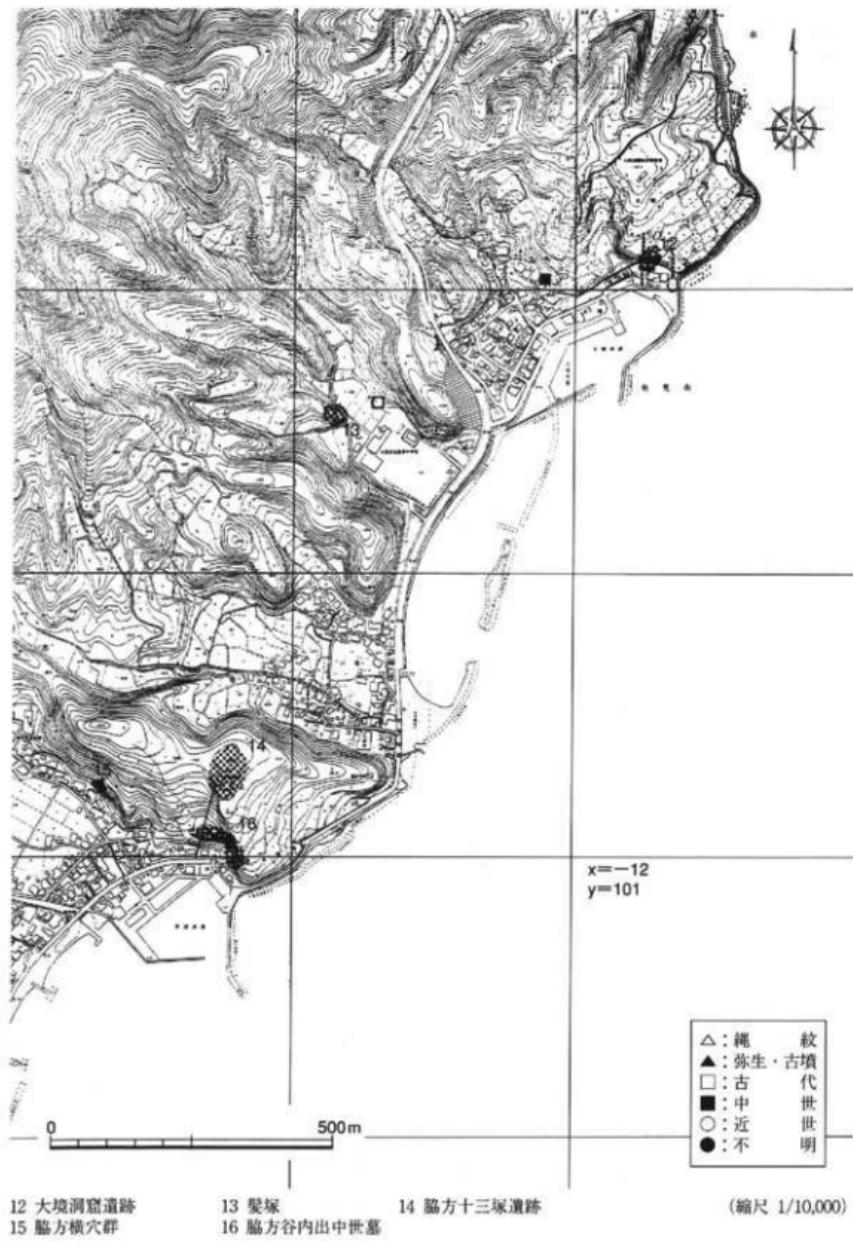
図版一〇 G地区の遺跡と遺物採集地点(四)



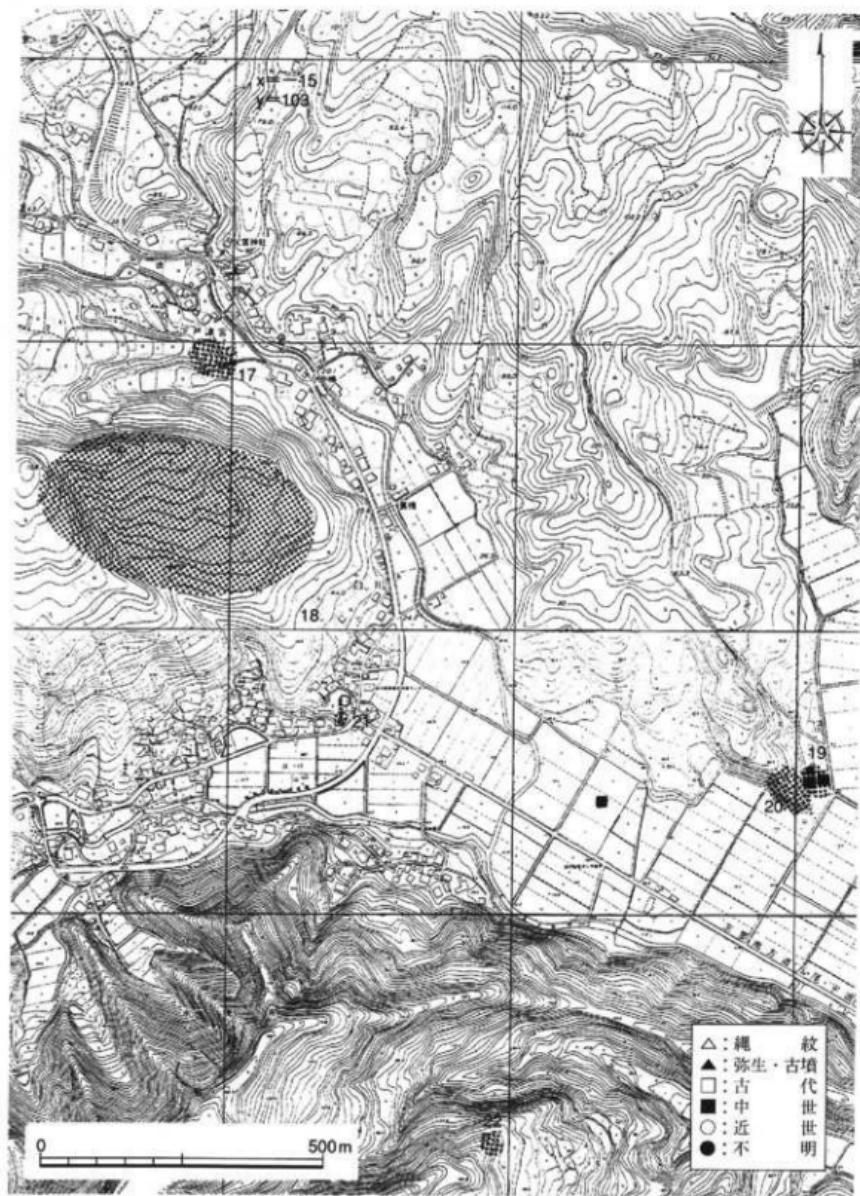
11 八代仙岩屋跡

(縮尺 1/10,000)

図版一 G地区の遺跡と遺物採集地点（五）



図版一
G 地区の遺跡と遺物採集地点 (六)



17 戸津宮中世墓
20 熊野神社古墳群

18 白河城跡
21 摺鉢神社遺跡

19 宇波ヨシダ遺跡
22 宇波高坂遺跡

図版一三 G地区の遺跡と遺物採集地点(七)



23 宇波コウラウラ遺跡
26 宇波洞穴

24 宇波庚申塚
27 泊洞穴

25 宇波古墳
28 小杉谷内遺跡

(縮尺 1/10,000)



29 泊馬当遺跡

30 蔽田遺跡

31 蔽田葉師遺跡

(縮尺 1/10,000)

2000年3月25日 印刷

2000年3月31日 発行

水見市埋蔵文化財分布調査報告書

水見市埋蔵文化財調査報告書第28冊

監修・発行

水見市教育委員会

富山大学考古学研究室

印刷

有限会社ひふみ印刷社